



シルクロード、西安からローマまで12,000km、94年6月から96年11月まで2年半、単独で歩いた人の本を見つけた。この本を借りるのに待つこと2か月、本はぼろぼろだった。地球一周4万キロを目指して歩いているウォーカーには、きっと何かを与えてくれるに違いない。発行：めこん社（東南アジア関係専門出版社）、A5版、622頁、絶版になっていない。以下、要約してお伝えします。写真は著作権上掲載できないのは残念。

大村一朗、1970年、清水市生まれ。著の前書きに動機など書いてある。摘記すると、徒歩旅行にはおよそ特別な技術は必要ない。ただ二本の足と未知へのあこがれだけが原動力、有史以前からの旅のスタイル。なぜ今、あえて徒歩

旅行なのか。そしてなぜ私は歩き続けたか。学生時代、私は劣等感のかたまりのような人間であった。何か一つ、自分にとって途方でもなく大きなことを最後までやり遂げることが出来たら、自分変わるかもしれないと夢想始めた。小さなきっかけは大学三年の夏、遊びに行く金もなく、退屈しのぎに寝袋一つで清水の実家まで野宿しながら6日間歩いたことだった。道中、見知らぬ人と交わすちょっとした会話が嬉しくてたまらなかった。これまで味わったことがない不思議な幸福感を私に与えてくれた。翌年、ハバロフスクからモスクワまで列車で6泊7日の旅をした。マルコポーロは東方旅行に25年もの歳月を費やした。それが列車でわずか一週間、歩いたらどれくらいかかるだろうか、西安からローマまでの距離が約12,000kmと知る。計算すると2年半、膨大な時間だが人生70年に比べればほんの一瞬、幾世紀もかけて行われた民族の移動や文化の伝播の痕跡を、わずか2年半で垣間見ることが出来るとすればやる価値があるのではないかと思った。当初はあくまで夢に過ぎなかった。ローマまで歩き通すなんてどだい無理に決まっている。途中で野垂れ死にするか、山賊に殺されるかもしれない。しかし、今動かずにいつ動くのか。ローマに着く着かないか、結果は二の次でいい。実行に移せるか否か、それが人生の大きな分岐点になるに違いない。もし万一、ローマに辿り着くという強運に恵まれたなら、きっとそこには生まれ変わった新しい自分がある筈だ。と積年の夢をこの旅に託したのです。徒歩旅行から3年、1964年6月1日、私はようやくスタート時点の西安の西門に立った。



以下、中国（西安から次の国の国境までかかった日数220日目とその距離3,350km。以下同じ）、カザフスタン（243日目、3,707km）、キルギスタン（274日目、3,967km）、ウズベキスタン（325日目、5,090km）、トルクメニスタン（394日目、6,305km）、イラン（601日目、7,619km）、トルコ（751日目、9,514km）、ブルガリア（765日目、9,853km）、ルーマニア（794日目、10,484km）、ハンガリア（823日目、10,985km）、スロベニア（839日目、12,284km）、イタリア（873日目、11,992km）の13国を訪れた。

ローマまで一日平均歩いた距離は休養日もあり平均すると14kmである。中央アジアは最も過酷な旅であった。地図帳を見ながら想像を巡らして下さい。それぞれの国の自然、風土、人々の生活の様子、日常の出来事など622頁にわたって書かれており、普段途中で眠くなってしまう私ですが、次から次と起こる日常の出来事は飽きさせてくれない。このうち、独自に選んだ逸話を紹介したい。世界地図をお手元におくとよいかもしれない。

中国、公安という存在：、公安は権威を振りかざし思うまま。悲惨なのは新疆ウイグル地区の人々、回教は封じられ否応なしに中国化が進む。今も変わっていない。一方、中国領内では日本人であることに嫌な顔をされなかった。憎むべきは日本人ではなく日本軍国主義であると歓待された。

歩いた証明：遼寧省から内モンゴル自治区の荒野を突き抜けウルムチまで歩くという 28 歳の青年に出会った。これまで歩いた証拠といって郵便局でスタンプを押して貰っているとスタンプ帳を見せてくれた。「お前はここまで歩いて来た証拠があるのか」と。「私は詳細な日記をつけている」とノートを見せた。青年は「それは中国では証拠にならぬ」という。まるで IVV 記録認定しか証拠にならぬと言っているようですね。

旅の友に救われる：武威から 18km の所で、二人の徒歩旅行の学生と会い永昌まで一緒することにした。彼らは 2.5 リットルの水筒に茶を入れたが大村は何の準備もしなかった。しかし、ゴビ砂漠の恐ろしさを身を持って知ることになる。暑さと渇きによる体力の消耗。二人は水をくれリックまで持ってくれた。目的の東寒に着いたのは 20 時過ぎ、43 km も歩いたのは初めて。中国滞在ビザがあと 4 日で切れる。二人の骨折りでビザの延長を終える。歩くペースが違い、これ以上迷惑を掛けられないので別れる。

ビザ切れ、再取得のために一旦、香港、北京へ 2 か月ロス：中国の滞在期限は 60 日、到底中国を横断できない。延長は原則 1 回限り。トルファンで再々延長を局長宛て直訴状まで書いて提出したが認められず、香港、北京まで飛行機で舞い戻り新規にビザを取得しトルファンに戻る。この間 60 日ロス、季節も 12 月半ば、気温マイナス 10 度になっていた。

ドライバーは親切：一人で歩いていると車を止め、乗っていけと言われたことが多い。どこから、どこまで、目的を説明すると、励ましてくれる。水は有難い。カザフスタンでは「とっておけ」とポケットに紙幣をねじ込む。断ると「これがウズベクの流儀だ」と怒られる。その夜の宿泊代 20 スム（約 80 円）に有難く充てさせてもらった。このような事例は数多くあった。



下痢・肝炎：水、食べ物、疲れで下痢になることしばしば。枚挙の暇がない。新疆ウイグルのオアシス都市ハミでは「市場の屋台で食べたシンケバブが当たり下痢になり 7 日間休養のロス。イラン国境を出た所で白目が黄色に、バスでテヘランまで、9 日間入院治療し再びバスでイラン国境まで戻りあるきを続行。

怖いのは犬、狼：イラン、町の家々では防犯のため犬を放し飼いにしている。噛みつかれると狂犬病の恐れ。両足の脛に新聞紙を厚く巻き、ズボン、股引、厚い羊毛靴下、登山用靴下に加え新聞紙でガード。調理用バーナーを改良して火炎放射器をこしらえた。射程距離は 2m、最大の弱点は風。トルコはイランの比ではない。農家は及ばず、国道の至る所で待ち構えている。狼や家畜泥棒、ゲリラのためである。愛用している鉄の杖で応戦しなければならなかった。



荷物の運搬用にロバを買う：テント、寝袋、炊事道具など入った重いバックを担いで歩くのは大変。楽にするためカザフスタンのタスカラスという町でロバを 100 ドルで買ひルー（路）と名付ける。楽にはなったが意外にのろい。餌を食べる際、手綱を離してやると逃げられること数回、キルギスタン入国後売却した。

子供のせいにする親：ウズベキスタンのある町で地元 TV の取材を受ける。その TV を観ないかという男の家に一泊する。家族を挙げて歓迎。翌朝出発後貴重品袋から 200 ドル無くなっていることに気づく。戻って問い詰めたが強く否定、言い合いになり「警察に連絡する」と言ったら、連絡を惧れて子供の出来心のせ

いにし 200 ドル返した。無実のせいにされ泣きじゃくる子。「いいんだよ。お前が悪くないのは知っているから」。芽生えた親への不信感を生涯持ち続けることになるのであろうか。(当時の所持金は 620 ドル)

国境間は緩衝地帯：国境 1km 地帯はどこの国にも属さない緩衝地帯、歩行は許されず移動はバス。出国でも厳しい国もある。トルクメニスタンからイラン入国の際、トルクメニスタン人とイラン人以外認めないという。陸路による国境越えを断念、飛行場のある町まで戻って週一便の飛行機を待ちイラン側に飛びビザを取得。イラン側国境の町までバスとタクシーを乗り継いで旅をつづけた。たった 1km の緩衝地帯のためであった。カザフスタンのチェンジャという町では半径 50km 圏内は治安上、危険地帯に指定されていて警察に連行され罰金 1,000 ダング (約 2,000 円)

親日的なイラン：この国では釣銭をごまかしたり、値段をふっかける人は殆どいなかった。笑い顔で近づいて来る人は純粋な好奇心以外何ももちあわせていない。外国人でも安心して路地裏を歩ける。1979 年のイスラム革命以後、イラン人に門戸を開いたのは日本だけ。日本での仕事は所謂 3K だが、熱心に働く彼らは現場の男達に可愛がられた。戒律の厳しいイランで育った彼らにとって生まれて初めて自由に羽を伸ばした青春の一頁だったのである。

一日に歩く距離 驚くべき強歩の男に遭う：大村は一日約 30km が目安。この距離はシルクロードにあるチャイハナ (GS・簡易休憩所) の間隔である。大体 3 日歩いて一日休むことにしているが実際はそうはいかない。長安から歩いて 697 日目 (9211km) トルコのコルフエズという町で声をかけてくれたおじいさん。「なに 30km 前後。少ないね。わしなんか一日 70km、それを連続 25 日だぞ」と言いつつトルコの端から端まで歩いた証拠にと自ら描いた簡単な蛇腹の絵巻 1m とその快挙を掲載した 1981 年の新聞記事を見せてくれた。



トルコの睡眠薬強盗：イスタンブールは東西の接点、観光客が多い。「日本の方ですか、印象は」身なりの良い男が英語で話しかけて来た。自分は警官で今日は非番、夫婦で日本へ旅行したい。話を聞かせて、昼飯を一緒にしないかと高級ケバブ専門店へ。ラクという国民酒を勧められ。睡魔が・・・気が付くと高速の路肩。やられた、5000 ドル分の TC と現金 15 万円、一眼レフカメラ。警察へ行くと病院で血液検査を勧められ、この男だろうと写真を見せられる。常習犯、4 回捕まっているが、そのうち 3 回は日本人。銀行で TC は半額再発行されたが、あとの半分は調査後、現金 15 万円とカメラは諦めるしかなかった。最も心を悩ませたのは資金の殆どが両親と姉のカンパだったこと。

外国語コンプレックス：トルコのある町のはずれ「ハロー」と、振り返ると二人の女子高生。トルコ語で返すと二人は拍子抜けした様子。外国人は英語で話しかけねばと思い 30 分も声を掛けそびれたという。あまりにも日本人に似た遠慮深さ。日本人の外国語へのコンプレックスはそのまま外国人へのコンプレックスなのか。トルコ語は学んで見ると、これほど日本語よく似た言語が存在するかと思った。

ミニスカートに驚く：ブルガリアに入ると、どの店も女の子も超ミニスカートかピチピチの短パン。イスラム圏を長く旅をして来た私にはあまりにもショッキングな光景あった。飲物はチャイではなく、コーヒー、コーラ、炭酸水と変わる。



嫌われるロマ (ジプシー)：ブルガリアに入り、人種と貧富の差による棲み分けは田舎町でも顕著で露骨であった。中心街にはスラブ系が住み、次にトルコ系、町の外縁にはチンゲーネ (ロマ) が住む。ロマが住む

地域には近づかぬようにと度々注意される。実際、子供達に取り囲まれタバコをせびられ、多数の女たちが集まって取り囲む異様な雰囲気、ローマは数百年前にインドからやって来たといわれ特別な言語を持っている。私も子供の頃、母に行っていけないと言われた集落があった。

ついに出てしまった空手：ルーマニア、773 日目、1 万キロを超えた町で夕方、高級外車から下りて来た 4 人の男に絡まれ財布が抜き取られた。「返せ」と怒鳴りつけた。4 人がかかって来たのでついに空手が出てしまう。マフィアの舎弟かチンピラであろう。仕返しを恐れ先を急いだ。これまで空手の型を見せたことは何回かあったが、空手を使ったのはこの一回限り。空手は護身術ではなく護心術に習った筈なのだが・・・

郷愁：ハンガリア、人口 10 万人のケチケメートという町、広場でオカップ頭の少女 40 人ほど引率した男教師の指揮で「さくら さくら」を合唱していた。観衆から拍手が沸き起こると少女達は恥ずかしそうにうつむき笑い合い、足早に立ち去って行った。日本からの修学旅行であろうか。私は懐かしさいっぱいになったが、何か鉛の塊でも飲み込んだかのような重い憂鬱を感じながら彼女達を見送った。

ローマ・ゴール：96 年 11 月 6 日、12,000km：ゴールは

古代ローマの遺跡「フォロ・ロマーノ」の全貌が見下ろすことができるカンピート広場と決めていた。その景色を見ながら旅に終止符を打つ。一步一步を踏みしめながら上がった。そして全てが終わった。西安を出発するとき友人が書いてくれた「シルクロード徒歩横断中」と書いてくれた紙を手に青年に記念写真を撮ってもらった。名前も知らぬローマっ子が「それはおめでとう」と私の右手を固く握って祝福してくれた。目の前に広がる古代ローマの遺跡よりも、ずっと相応しい最後の場面に思えた。人生が刻一刻と新しい時を刻み始めているのを感じながら、広場を後にした。



それからの大村さん：大村さんは自分の体験をまとめ出版するまで 7 年の歳月を要した。2004 年よりフリーのジャーナリストとしてテヘランに在住、2006 年からイラン国営放送ラジオ日本語課勤務、2009 年以降のイラン騒乱に際しほぼすべてのデモに足を運びイラン情勢を伝えた。2012 年 3 月帰国、アジアプレス勤務。

PLAN DO SEE 若いころ IBM の研修で教わった言葉です。計画と実行はあっても記録、評価が大切なところ、これを実行し本 HP の好連載の読み物となっている池内淑皓さんと平野武宏さんの体験記には深甚なる敬意を表します。

追記：渡辺正俊さんは中国政府の招請で石油資源探査のため、ハミ、シャンシャン、トルファン、ウルムチに 10 回も行かれています。また、宗谷岬から佐多岬まで日本縦断 3000km、FWA の大和田精吾さんの記録（27 年 12 月）が「ひろば」に掲載されています。 写真は無料画像を使用しました。